

2025年2月16日

「天の国の報い」

マタイによる福音書 20:1-16

早川 真牧師

このたとえ話において主人は神様を示しています。そして労働者は私たち一人一人を示しています。神様は私たち一人ひとりの働きに応じてではなく、その存在によって、日々の必要を備えてくださっています。それは私たち一人一人が神様の目に大切な存在であるからです。

主人はいったいなぜ後の者から先に賃金を与えたのでしょうか。せめて最初に雇った者たちに最初にその報いを与えても良かったのではないか、そのように思います。

主人が一番初めに後の者に生活のために必要な賃金を与え、彼らを一刻も早く安心させてあげたのではないのでしょうか。一方最初に雇われた人たちは初めから一デナリオンがもらえることが分かっていたので、安心の中で仕事をしたことと思います。彼らは暑い中を辛抱して一日中労苦しましたが、それは生活に必要な報いがあると分かっている労苦だったのでやりがいと安心があったはずです。初めに雇われた人たちは、約束の賃金に上乗せしてこのやりがいと安心という報いを得ていたのだと思います。

私たちの人生もまたぶどう園で働くようなものです。時に苦しく辛いこの人生の労苦の中で、今日の働きが決して無駄にならないというやりがいと安心こそが何よりの天の国の報いなのではないのでしょうか。神の招きに応え、キリストを信じ受け入れる時、地上のものでは得ることのできない、心の底からの喜び、消えることのない希望、全き平安を頂くことができます。私たちがこの喜び、希望、平安をもって歩めている、それは何よりの報いではないかとこのたとえ話は語りかけているように思います。